

源氏物語總釋

第二

尾上八郎著
石村貞吉著
風卷景次郎著

源氏物語

樂浪書院刊

昭和十二年五月一日印刷

昭和十二年五月五日發行

源氏物語總釋 第二卷

頒價二圓

著者代表 風卷景次郎

東京市牛込區江古田一ノ二〇五四

發行者 篠田太郎

東京市牛込區兒習田鶴樂町一〇七

印刷者 吉原良三

株式會社 社會康社 文行
三快堂製本

發行所

東京市牛込區
丁目野
一田中
五番地

樂浪書院

電話四谷一〇八〇番
振替東京八〇〇四七番

目次

尾上八郎(一)
尾上八郎(一〇三)
石村貞吉(一二五)
石村貞吉(一九三)
石村貞吉(二六五)
石村貞吉(三七)
風卷景次郎(三六三)
風卷景次郎(四七)
風卷景次郎(四七)
風卷景次郎(四七)
風卷景次郎(五一)

賢

木

尾

上

八

郎

秋好齋宮の、伊勢へ下られる日が漸く近づくに従つて、御母の六條御息所は、何となう御心細く思される。あの御身分の高くつて、御息所から見れば、面倒くさいものと思はれたその葵の上も亡くなられた後は、御息所が正妻に立たれるであらうと、世間の人も噂しあひ、御息所の御殿の人々も、若しやと心騒ぎがしたけれど、葵の上が亡くなられた後は、却つて源氏は何のおとづれもなさらず、餘りになさけない御仕打であるのを御覽になるにつけて、御息所は、かうなつたのも、生靈いきすだまといふ噂の爲に、君は御心から不快に思されたであらうと、飽くまでも御解釋になられたから、あらゆるあはれな心を抛つて、一途に伊勢へ赴くことに定められた。然し親が齋宮に付き添うての伊勢へ下られる先例も、特別にないが、御年少な齋宮を全く手離しての旅は、親として許されないといふことを口實にして、憂き世から離れたいと思されるのに、源氏におかれても、生靈のことはとにかく、もういよく

齋宮の御下り近うなりゆくまゝに、御息所ものごころ細く思はす。やむごとくわづらはしきものにおぼえ給へりし大膳の君も亡せ給ひて後、さりともと世の人もきこえあつかひ、宮の内にも心ときめきせしを、その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見給ふに、まことに憂しと思ふことこそありけめと、知りはて給ひぬれば、よろづのあはれをおぼし捨て、ひたみちに出で給ふ。親添ひ下り給ふことも殊になけれど、いと見放ちがたき御有様なるにつけて、憂き世を行きはなれなむと思すに、大將の君、さすがに今はとかけ離れ給ひなむも口惜しう思さ

御別れとなつて、遠く御離れになることも残念に思はれて、御文ばかりは、御心籠めた書きぶりで、度々遣はされる。然し御對面することは、今となつては宜しくあるまいと、御息所の方でも御思ひになる。それといふのは、源氏は自分を氣に入らぬものだと、思ひ含まれてゐる事もあらうのに、今更お逢ひしたならば、自分は一層苦しい思をしなくてはなるまいから、それは面白くないことだと、御息所は心強くもお考へになつたからであらう。御息所は、六條京極の御殿には、一寸御歸りになる時も折々あるが、極くお忍びの體であるから、源氏は御氣附きにもならない。御息所の、今御住ひの野の宮は、御心のまゝに容易に參ることの出来るところでもないから、源氏は御不安ながらに月日を送つて居られた處が、桐壺院が重々しい御病ではないが、時々御不例に渡らせられるので、君はいよゝゝ御心の落ちつく折もないけれど、御息所が自分を無情な者に思ひこまれるであらうと思ふと、氣の毒で

れて、御消息ばかりはあはれなるさまにて、たびゝ通ふ。對面し給はむことをば、今更にあるまじきことと女君も思す。人は心づきなしと思ひおき給ふこともあらむに、我は今すこし思ひ亂るゝことのまさるべきをあいなしと、心強く思すなるべし。もとの殿にはあからさまに渡り給ふ折々あれど、いたり忍び給へば、大將殿はえ知り給はず。たはやすく御心（こころ）にまかせてまうで給ふべき御すみかにはたあらねば、おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上おどろおどろしき御惱にはあらで、例ならず時々惱ませ給へば、いとど御心の暇なけれど、つらきものに思ひ

もあり、又人に聞かれても、薄情に考へられはしないかと思ひ起されて、野の宮に赴かれる。

時は九月七日頃であるから、齋宮の御下りも全く間近に迫つたと御考へになると、御息所の方でも御氣忙しいけれど、源氏から、一寸でもお逢ひしたいとたび／＼御便りがあつたから、御息所はいやもうお逢ひしまいとて御迷惑がられながらも、それでは餘りに引込みすぎてゐるから、何か几帳でも隔てた上の御對面だけならば、差支あるまいと、御内心御待ち申上げてをられた。源氏は、廣々とした嵯峨野の野路を分けて進まれるところから、もう大變物哀れを感じられる。秋の草の花はすっかり萎れて、枯れかゝつた淺茅が原に、鳴く虫の音も細々と弱つた中に、いとも寂しく松風の音が吹きまじり、その間に何の曲とも聞き取れない位樂の音が、野の宮の方からとぎれ／＼に流れて來る趣は、まことに優美である。親しい御前驅の者は十餘人ばかり、御隨身は餘り目に立

はて給ひなむいとはしく、人ぎき情なくやと思し起して、野宮ののみやにまうで給ふ。

九月七日ばかりなれば、むげに今日明日と思すに、女がたも心あわたしけれど、立ちながらと、たび／＼御消息ありければ、いでやとは思し煩ひながら、いとあまり埋うめれいたきを、物越しばかりの對面はと、人知れず待ち聞え給ひけり。遙けき野邊を分け入り給ふより、いと物あはれなり。秋の花皆衰へつゝ、淺茅が原もあはれかれ／＼なる虫の音に、松風すぐく吹きあはせて、そのことも聞きわかれぬ程に、物の音ども絶え／＼聞えたる、いと艶なり。睦まじき御前みづかひ十餘人ばかり、御隨身こと／＼しき

つ姿をしないで御側に従ひ、君は極くお忍びの體ではあるが、特別御めかしの御装束は、大變御立派に見えたので、御供の風流の嗜みのある者たちは、この場所柄もいゝのであるから、一層美しさを感じた。君も御心中に、どうして今まで、かやうな趣のある所へ、繁々訪づれなかつたであらうかと、過ぎた月日が悔しく思はれる。野の宮は、何となく頼りなげな小柴垣を外圍ひとして、板葺の家があちらこちらに、極くお粗末に建つてゐるやうである。ではあるが、黒木のいくつかの鳥居は、神々しく見渡されて、艶な事では憚り多い様子があるのに、神官達がそこゝで咳拂ひをして、互に話し合つてゐる様子などは、他の場所とは一風かはつた有様である。火焼屋の火がほのかに光つて見え、あたり人の氣配も少く、しんみりとしてゐて、こんな所で、愁はしい御息所が、自分と逢はずに、月日を送つて居られる時を推量^{おはか}つて見ると、君はまことに、大層あはれに痛ましいと思される。

姿ならで、いたり忍び給へれど、ことに引きつくり給へる御よそひ、いとめでたく見え給へば、御供なるすき者ども、所柄さへ身にしてみて思へり。御心にも、などて今まで立ちならさざりつらむと、過ぎぬる方悔しう思さる。物はかなげなる小柴を大垣にて、板屋どもあたり／＼とかりそめなめり。黒木の鳥居どもは、さすがに神々しく見え渡されて、煩^{わづら}はしき氣色なるに、神司^{かんすゐ}の者ども、此處彼處にうちしはぶきて、おのがどち物言ひたるけはひなども、外^{ほか}にはさまかはりて見ゆ。火焼屋^{ひやきや}かすかに光りて、人氣すくなくしめ／＼として、此處に物思はしき人の、月日を隔て給へらむ程を思しやるに、いといみじうあはれに心苦し。

北の對の屋の適當なところに、源氏は御身を隠されて、御尋ねの旨を仰せられると、音楽はすつかり止めて、女房達の振舞ふ奥床しい様子が、しば／＼聞えて来る。御息所は、取次の女房を介して、何やかや御挨拶があるだけで、御自身は、御對面になられさうな御様子でもないで、君は御不快に思されて、

「かやうな忍び歩きも、もう今は自分に取つては似つかはしくない身分に上つたのであるから、伺つた自分の心を御察しあらば、かやうに内にも入れないで、外に立たせるやうな御處置はなさらないで、鬱陶しい自分の心を晴らしたいものである」

と、まじめに仰せられると、女房達は、

「ほんとに全く御氣の毒にも、御身の御處置に御當惑のやうであるのに、御不憫のことである」

など取り扱つて上げると、御息所の御心の中では、さあそれは考へもので、此處に居る女房達に對しても外聞がわるく、娘の齋宮

(二二) 北の對のさるべき所に立ち隠れ給ひて、御消息聞え給ふに、遊は皆止めて、心にき氣配あまた聞ゆ。何くれの人づての御消息ばかりにて、自らは對面し給ふべきさまにもあらねば、いとものしと思して、「かやうのありきも、今はつきなき程になりにて侍るを思し知らば、かう注連(しめふし)の外にはもてなし給はで、いぶせう侍ることをもあきらめ侍りにしがな」と、まめやかに聞え給へば、人々「げにいとかはらいたる立ち煩はせ給ふに、いとほし」などあつかひ聞ゆれば、いさやこゝの人目も見苦しう、かの思さむことも若々しう、

の思はくを考へても年效としがひなく思はれて、御目にかゝることは、今更恥かしいことだと思はれると、大層氣が進まないけれど、然し辛くあたることも褒めた話でもないから、とやかく歎きつゝぐずぐずしてから、そろ／＼と出て行かれた御様子は、まことに奥床しい。君は、「齋むべきこの宮に、簀子へ上ることだけは許されますか」とおつしやつて、上つて居られた。花々と現れ出た夕月の光の下に、舉動ふるまつてゐられる君の御姿の美しさは、類ふものなく美しい。この幾月來の積り積つたことを、具合よく仰せられるのも、云ひにくいほどの隔りになつてしまつたから、少しばかり折つて、手に持つて居られた榊の枝を、御簾の下からさし入れて、「この榊葉の常磐の色にも似た、自分の變らぬ心を力として、自分は神域をも犯して、お訪ねしたのである。それであるのに、さやうに隔てがましいのは、辛いことである」と仰せられると、御息所は、

出で居むが今更につゝましきことと思すに、いと物憂けれど、情なりもてなさむにもたけからわば、とかう打ち歎きやすらひて、ゐざり出で給へる御氣配、いと心にくし。「こなたは簀子ばかりの許されは侍りや」とて、上り居給へり。花やかにさし出でたる夕月夜に、うちふるひ給へるさま、にはひ似るものなくめでたし。月頃のつもりをつき／＼しう聞え給はむも、まばゆき程になりにければ、榊をいさゝか折りて持も給へりけるをさし入れて、「變（こ）らぬ色をしるべにてこそ、忌垣（忌）をも越えはべりにけれ。さも心憂く」と聞え給へば、

國三輪山には、人を導くしるしの杉が立つてゐるといふが、此處にはさるものはない。それなのに、君は何で間違へて、榊などを折取り、それをしるべとして、御訪ねあつたか

と言はれると、

國何の間違ひであらう。君は齋宮の御側近いと思つたから、榊葉の香がなつかしいまゝに、それを尋ねて参つたのである

此處は、一體の様子が、君に取つては面倒ではあるが、御簾の裾だけは捲つて、からだをさし入れ、長押に寄りかゝつて居られた。

源氏は思ふがまゝに、御息所に逢ふことも出来たし、御息所もまた慕はしげに思はれた時分は、心が高ぶつて、それ程にも御息所を愛せられなかつた。それに御内心、御息所に疑はしい缺點、あの生靈のを感じてしまはれた後は、またその心もさめたので、かやうに御二人の間柄も遠ざかつたところが、珍しい今宵の御對面が、交情濃やかだつた當時を思出させるので、君は非常に

かみ垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさきぞ。

と聞え給へば、

を(そ)とめこがあたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ

大方の氣配煩はしけれど、御簾はかりは引き着て、(こ)長押におしかゝりて居給へり。

心にまかせて見奉りつべく、人も慕ひざまに思はれたりつる年月は、長閑なりつる御心おごりに、さしも思されざりき。又心の中に、いかにぞや。きずありて思ひ聞え給ひにし後、はたあはれもさめつつ、かく御中も隔たりぬるを、めづらしき御對面の昔おぼえたる

獲性く

御心が亂れて、あはれと思される。今までのこと、又これからのこと、思ひは思ひを産んで、心弱くも君は泣かれた。御息所は心弱さを見せまいと思ひ隠されてをるけれど、こらへられない御様子を見取つて、君は愈々御氣の毒に思ひ、やはり伊勢へ下ることは、御止まりになるやうにと御話しになるやうである。夕月も沈んだのであらうか、暗い趣深い空を眺めながら、怨み言を仰せられるので、御息所は、胸に集めてゐられた數々の怨みも融けてしまふ事であらう。これにつけても、御息所は、やつと決心したものの、逢つて見れば案の定駄目だつたと、却つて搖ぎ出した御心は、千々に亂れるのである。殿上人の若い公達等が連立つて、いつまでも離れないことの庭の趣も、まことに優美の方にかけては、どこにも譲らない有様である。何も彼も物思の限りをつくされた御間柄であるから、互に話し合はれた數々の事を、そのまゝこゝに傳へる事は、とても出来ない事である。やうやく明けてゆ

に、あはれと思し亂るゝこと限りなし。來し方行くさき思しつゞけられて、心弱く泣き給ひぬ。女はさしも見えじと思しつゝむめれど、え忍び給はぬ御氣色をいよいよ心苦しう、なほ思しとまるべきさまをぞ聞え給ふめる。月も入りぬるにや、あはれなる空を眺めつつ怨み聞え給ふに、こゝら思ひ集め給へるつらさも消えぬべし。やり／＼今はと思ひ離れ給へるに、さればよとなか／＼心動きて思し亂る。殿上の若君達など打連れて、とかく立ちわづらふなる庭のたゞまひも、げに艶なる方（う）けばりたるありさまなり。思ほし残すことなき御なからひに、聞えかはし給ふことども、まねびやらむかたなし。やり／＼明けゆく空

く空の趣のよろしさ、わざ／＼作り出したかと思はれるやうに、おもしろい。

國曉の別は、何時でも涙がちのものであるが、今朝の別は一人と涙が流れて、眺めやるこの夜明の空は、まことにたぐひなく悲しい

君が、離れ難げに、御息所の御手を執へて、ためらうて居られる御姿は、大層なつかしい。曉の風が大變冷たく吹いて來、松虫の鳴きからした聲も、時を知つてゐるやうである。さほど愁のない人でさへ、寂しいその音を聞き流しは出來さうにもなく、歌でも詠まれさうである。況んや、御二人は一人あはれの心でありながら、却つて思ふまゝに歌へぬのは、分別もなく御心が亂れたためであらうか。御息所は、

國一般の秋が過ぎて行くことでさへも、悲しい思を起させるのに、野邊の松虫よ、汝が更に細々と鳴いて、一層愁の心を募

齊 木

のけしき、ことさらにつくり出でたらむやうなり。

あかつきのわかれはいつも露けきをこは世に知らぬ秋のそらかな

出でがてに、御手をとらへてやすらひ給へる、いみじうなつかし。風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる聲も、折知り顔なるを、さして思ふことなきだに、聞き過し難げなるに、ましてわりなき御心まどひどもに、なか／＼こともゆかぬにや。

大方の秋の別れも悲しきに鳴くねなそへそ野邊の松虫

一一

らしてくれるなよ

源氏は、悔心の數々湧き出ることではあるが、今となつてはその效はないので、明るくなつては具合がわるいと思つて、早く出て行かれる。道には露がしとどにおりてゐる。御息所も心強くはして居られず、別れの餘情をしみじみ感じながら、外を眺めて居られる。若い女房達は、月の光にほのかにお見受けした君の御姿、あたりに漂ひ残る君の御香を心に深く感じて、何か不心得のことでもしでかしさうな程、君をお褒め申上げた。「どんな大事な旅の道であるかは知らないが、こんな美しい君を置きざりにして、お別れ申上げることの出来るものではない」と言つて、分別もなく互に涙を浮べた。君が歸られて、よこされた御文は、いつもよりもこまぐと、御心の籠つたものであつた。それを御手にされた時、御息所は御心が引かされて、下向もやめられさうな程ではあるが、今又考へ直して、ぐずぐずされるべきことでないから、やはり御下り

悔しきこと多かれど、かひなければ、明けゆく空もはしたなくて出で給ふ。道の程いと露けし。女もえ心強からず、名残あはれにて眺め給ふ。ほの見奉り給へる月影の御かたち、なほとまれるにほひなど、若き人々は身にしめて、あやまちもしつべくめで聞ゆ。「いかばかりの道にてか、かゝる御有様を見捨てゝは別れ聞えむ」と、あいなく涙ぐみあへり。御文常よりもこまやかなるは、思しなびくばかりなれど、又うち返し定めかね給ふべきことならねば、いとかひなし。男はさしも思さぬことを

になるので、全くその效がない。君はさほどにも思つて居られぬ事ですらも、情心の上からは、御言葉上手に綿々と語られるやうであるから、ましてや並々の程度を遙かに越して、深く思つて居られた御息所が、こんなわけで、御心に背いて伊勢へ下つて行かれることを、情なくも氣の毒にも思ひ煩はれることであらう。御息所の旅の装束をはじめとして、御供の者のものまで、色々の御道具ななどを、しつかりと珍らしいと思ふばかりにしてお贈りになつたが、御息所は何の嬉しくも思はれない。輕々しくも厭な憂名ばかりを立てられて、自分ながら情ない此の身の有様を、下向の近づくにつれて、今更のやうにひしと御心に感じて、起きても寝てもお歎きになつた。齋宮は、どちらともきまらなかつた母上の御旅立が、かやうに定まつてゆくことを、若い御心から、ひたすら嬉しいと思はれた。世間の人は、齋宮の御下りに、親の附添ひは先例のないことだと、非難したり、同情したり、色々噂すること

だに、情のためにはよくいひつゝけ給ふべからめれば、ましておしなべてのつらには思ひ聞え給はざりし御中の、かくて背き給ひなむとするを、口惜しうもいとほしうも思し惱むべし。旅の御装束よりはじめ人々のまで、何くれの御調度など、いかめしう珍しきさまにて、とづらひ聞え給へど、何とも思されず。あは／＼しう心憂き名をのみ流して、あさましき身の有様を、今はじめたらむやうに、程近くなるまゝに、起き臥し歎き給ふ。齋宮は若き御心に、不定なりつる御いでたちの、かく定まりゆくを嬉しとのみ思したり。世の人は例なきことと、もどきもあはれ